

令和8年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【慈恩寺小学校】

学力向上
アクションマップ

①	今年度の目標と学力向上策
重点的に育成する 資質・能力	【知識・技能】基礎・基本の確実な定着と系統的な理解 国語：前学年までの記述漢字の確実な習得と、文の構造(主語・述語、修飾・被修飾)の理解。 算数：中学年における計算技能(多位数の乗除)の定着。 【思考・判断・表現】情報を読み解き、根拠を持って表現する力 算数：「データの活用」領域において、複数のグラフや表から必要な情報を抽出し、解釈・比較する力。 国語：目的や相手に応じ、図表などの視覚資料を用いて自分の考えを論理的に構成し、記述する力。 【学びに向かう力・ICTを活用し、自ら課題を解決しようとする態度】 自分の習熟度や興味に応じて学習内容を選択し、粘り強く取り組む態度(個別最適な学びの基盤)
↓	
実施する学力向上策 【時期・頻度】	①ICTを活用した補充学習【漢字や計算の定着に課題がある児童に対し、個々の進度に応じた反復学習を行う。じっくりタイム・家庭学習(毎日)】 ②算数科における少人数指導の継続と充実【少人数指導において、自力解決の時間を確保し、個別のつまずきに丁寧に対応する。各学年(3～4回)】 ③「説明し合う」対話活動の活性化【算数の解き方や理科の考察において、自分の考えをペアやグループで言語化し、他者の視点を取り入れる。(毎授業)】 ④「データの活用」の日常化【社会科学や理科、生活科の授業において、グラフや表から事実を読み取り、考察する場面を意図的に設定する。(各単元)】 ⑤「書くこと」の質の向上(横断的授業)【図表やグラフを根拠として引用し、自分の考えをまとめる活動を全教科で共通して取り組む。(月1～2回程度)】

⑤	年度末評価	
学力向上策の実施状況	評価(※)	①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当) ③分析共有(児童生徒の実態把握) 児童会議・校内研修等
↓		
今年度の成果と次年度の課題	向上策の妥当性	結果提供(2月)

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

④	さいたま市学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	
↓	
結果から考えられる 児童生徒の実態	①学校全体での取組 ②単元テスト・定期テスト 等の分析・活用 ③中間評価を経ての取組 ④調査結果を活用した授業

②	全国学力・学習状況調査結果の分析
特徴的な結果	国語では、「話すこと・聞くこと」の領域で県平均を上回り、相手に伝わるように発表内容や資料の工夫を捉える問題で良好な結果が見られた。一方で、「情報の扱い方に関する事項」や記述式問題の正答率は県平均を下回り、複数の情報を関連付けて読み取ったり、根拠を明確にして自分の考えを書いたりすることに課題が見られた。 算数では、小数や分数など基礎的な内容については概ね定着が見られる一方、「変化と関係」「データの活用」領域の正答率が低く、割合や表・グラフを基に考察する問題、考え方を記述する問題に課題が見られた。
↓	
結果から考えられる 児童生徒の実態	児童は、話し合いや発表などの対話的な学習活動には意欲的に取り組み、他者の考えを理解する力に付いている。一方で、複数の資料や情報を整理し関連付けながら考えることや、根拠を明確にして自分の考えを表現することに課題が見られる。また、算数においては割合や数量関係、データ活用に関する理解が十分とは言えず、問題解決の過程や考え方を言葉や式で説明する力の育成が必要である。基礎的な知識・技能には個人差が見られるため、一人一人の実態に応じたきめ細かな指導を継続していく必要がある。

③	中間評価
学力向上策の 実施状況	評価(※)
	B
↓	
学力向上策の 見直し	基礎的・基本的な内容の定着を継続するとともに、複数の資料や情報を比較・関連付けながら考える学習活動を一層充実させる。また、国語科を中心に、根拠を明示して自分の考えを書く活動を全教科で意図的に設定する。算数科では、割合やデータ活用に関する学習において、図や表、グラフを用いて考えを説明する場面を増やし、思考・判断・表現する力の育成を図る。さらに、児童同士が説明し合い、多様な考え方に触れる対話的な学習活動を継続していく。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

教育研究所